

修理工事こぼれ話③ チョーク

部材に一時的に情報を書き込んでおきたい。修理中にはそのような場面に何度も遭遇します。その時に役に立つのがチョークです。

①番付を打つ前の仮番付 楼門は倒壊してしまっているため、部材が外れバラバラになっている箇所があります。

その場から動かしてしまうとわからなくなってしまうため、その状態でわかる範囲の情報を、大工さんに書き込んでおいてもらいます。

解体後、じっくりと調査をして元の場所を判明させて、番付札をつけてもらいます。



ひとまずチョークで番付を書きおき、番付札の準備完了後打ち付けられた部材

②釘穴への印 釘留めしてある部材を解体するときに、現在打たれていた釘によってあいた釘穴に印をつけています。角釘なら四角、丸釘なら丸で印をつけます。

何度か修理がされている箇所の場合、以前打たれたが今は使われていない釘穴というものもあります。それらは、色を替えて印をつけます。

この現場では、現在の釘穴を白のチョーク、過去の釘穴を赤のチョークでつけています。

修理歴の多い建物ですと、さらに分けて印をつけなければならなかったりしますが、楼門は当初から替えられていない箇所が多く、白チョークの印のみの箇所が多いです。



楼門の野垂木という部材には数回分の釘穴があり、修理の手が何回も加えられているのがわかります

③取替調査の修理箇所 破損した部材は一つ一つ調査し、修理方針を決めていきます。その修理方針を部材にチョークで書き込んでおきます。

調査と実際に修理を行う時には、どうしてもタイムラグがあります。こうしておくことで、修理方針が一目でわかります。



取替調査の一例

このように様々な情報をチョークで書き込んだ文字・印は、組立時には消して部材を組み立てていきます。

文化財建造物の修理にチョークはなくてはならないものなのです。 (石田 陽是)